

英語の特徴のいろいろ (その2)

(財) 高度情報科学技術研究機構

顧問 能澤正雄

1 はしがき

今回は、英語の歴史とも言うべき話を取り上げて、アングロサクソンの由来やバイキングの言葉ならびにノルマン人の言葉等の英語への影響等を見てきた。

今回はその続きとして、英語の発音や綴りの特徴について見ていきたい。

英語における最も多く使われる母音をご存じだろうか。それは、hot の o, cat の a, red の e, in の i, up の u, すなわち母音オアエイウのいずれでもないのである。それは標準の母音ですらない。それは、発音記号で書くと [ə] と表される schwa すなわち曖昧母音と称されるものである。それは animal の i, enough の e, orthodox の二番目の o, そして inspirational の二、四、五、六番目の母音でもある。殆ど全ての多重音節語の母音の少なくとも一つがこれである。

英語は、世界的に見て、どの言語よりも多くの音素を取り入れていることを考えると、英語がこの曖昧な音素に頼っているというのは少し不思議な気がする。もっとも、チェコ語の vrch pln mlh (霧のなかの岡) やケルト語の一派のゲールック語の pwy ydych chwi (貴方は誰ですか) に比べると、英語はかなりおとなしい言葉とも見えるかも知れない。しかし、一方において英語は他の言語から見ると反逆すると言うか挫けさせるような幾つかの音をもっている。その一つが the とか think の th の音である。1の音も東洋人

には難しいと思われる。

逆説的だが英語の発音に関して何か確かなことが言えるとすれば、それは確かなものが何一つ無いと言うことである。たとえば、同じ文字列すなわち、綴りなのに違う発音をする他の国の言語はないであろう。例を挙げる。

heard-beard	road-broad	five-give
early-dearly	beau-beauty	steak-streak
ache-moustache	low-how	doll-droll
scour-four	grieve-sieve	paid-said

ある言語、例えばフィンランド語では、発音と綴りにはきちっとした一対一の関係がある。フィンランド語では k は常に k であり、1 は 1 である。しかし、英語では発音は大きくと言うか、でたらめにと言うか、変化するのでアルファベット26文字のどの一つもが一定の音を持っていない。それらは、race, rack, rich のように種々の発音にからみつくか、または debt の b, bread の a, thistle の二番目の t のようにすねて無音となってしまうかである。これらの組み合わせとなると、発音はさらに御しにくく、予見し得なくなるのである。最も知られている文字の一群れは ough である。これは次に示すように8通りの発音がなされる。すなわち、through, though, thought, tough, plough, thorough, hiccough, そして lough (湖を表すアイルランド

系英語でロックと読む)である。次の二つの単語はそれぞれ 9 通りの発音を持っている。すなわち、hegemony と phthisis (肺結核)である。しかし、おそらく最も良く英語の発音の不条理を示すものとして、orthoepy (正音法)という言葉を目指しよう。これがなんと二通りに発音されるという事自体が不合理さを示していると言える。

2 英語の音の種類

殆ど人は英語が他の多くの言語に比べて多数の音を有していると言うことには同意しても、それでは幾つなのかとなると意見はいろいろである。この分野での英国の権威シメオン ポッターは英語には44個の明確な音があるとした。12の母音、9の二重母音、そして23の子音である。国際発音アルファベット (International Phonetic Alphabet) は恐らく最も広く用いられていると思われるが、英語を52の音に分け、子音と母音を等数に振り割っている。一方、American Heritage Dictionary は45を純粋な英語の音として挙げ、外国語起源に6音を当てている。イタリア語では約半分の27音、ハワイ語では13音である。

英語の音が44であるにせよ52であるにせよ、またはその中間の数であるにせよこれは多いと言える。そうは言っておきながらの話であるが、注意深く聞いていたならば、実際はもっと多くの音が用いられている。

例えば組み合わせ“ng”は普通には一つの個別的な音として扱われる。しかし、実際は二つの音がある、すなわち、singerではgはソフトに発音し、fingerではハードなgなのである。また、zing や bang のように描写的ないしは擬声音的な言葉では歌うように声を延ばすが、something や rang になるともっと無機的な声になる。もう一つの無意識的な区別は、those の場合のハードな“th”と thought のソフトな“th”である。辞書によっては区別

しないこともあるが mouth が名詞のときと動詞のときの区別、名詞 thigh と古語代名詞のthy の区別がこれに当たる。さらに微妙なものとしてはある語の始めにくる“k”での発音ではたとえば kitchen や conquer の発音のようにkのすぐ後にほんの一寸息を詰まらせるが、kがsのすぐ後にくる場合は skill や skid の発音のようにそんなことはしない。次のような I have some homeworks to do (宿題があるんです)では have を hav と発音する、しかし、I have to go now (もう行かなくっちゃ)のように強調する場合は、have をhaff と発音するのである。

3 発音のくせ

英語を実際に発声するに当たっては必ずしもそれが書かれているようにではなくて、相当程度に状況に応じて変化させて声に出している。たとえば、“ladies”と言っているつもりであっても、多分“laties”と言い、話が進んで早口になってくるとそれは“lays”となってしまふ。同様のことは、handbag にも言えて、hambagとなる。さらに、必要もないのに音声を挟むことがある。たとえば、“m”と“t”の音の間または“m”と“s”の間に“p”を入れて発音するとかである。だから、warmth は warmpth となり something は something となる。さらに“n”音と“s”音の間では“t”音が入ることになる。このため英語国民にとっては耳から聞くと、mints と mince の区別、prints と prince と区別が難しいのである。往々にしてこれらの闖入者が言葉の綴りにも反映されてしまう。もともとは gleam (かすかな光) からきた言葉 glimpse は初め glimsen であり、p はなかった。しかし、奇妙な p を入れたい欲求が時を経るにつれて変化させたのである。Thunder も元は d がなかった(ドイツ語では今も d がなく、Donner である)。同様なことが、stand の d (stood を見よ)、messenger の n (messageにはな

い)、pagentの t、sound の d についても生じたのであった。

英語国民は場所の名前になると不明瞭に続けて発音する傾向がある。オーストラリア人は“stralia”から来たと言ひ、カナダのトロントから来た人は Torontoans と呼ばれるべきであろうが彼は“Tronna”であると言う。アメリカのアイオワ人では、それは Iowa ではなくて Iwa となり、Ohio では Hia となる。Milwaukee からの人は“Mwakee”から来たと言う。Louisville では、それは“Loovul”、Newark では“Nerk”、Indianapolis は“Naplus”となるのである。Philadelphia の人は、そこからでなく“Fuhluffia”から来たとなる。筆者がシカゴ郊外に下宿していた家の親戚に Alexander という人がいた。この人を呼ぶ声は、筆者には荒木さんとしか聞こえなかった。

ある語から先端の文字が削り落とされることを apharesis (例 ; esquireがsquireへ)、後尾の文字が落ちることを apocope、そして中間の文字が無くなることを syncope と呼ぶ。これらはしばしば起こることであるが、次のような圧縮する例もある。すなわち、Day's eye が daisy に、sheep herd が shepherd に、loafward が load に、everich が every に、そして fourteen-night が fortnight にである。

4 発音の変化

発音の変化と言うものは言語の通例の特徴の一つである。あるときは世紀の単位で速さで変化し、あるときは全速力の慌ただしさで変化する。この現象は誰もが理解しえない理由で時々すべての言語において現れる。ドイツ語ではアングル族やサクソン族のブリテン島への離脱からそうは経たない時期にこのことが起こり、南方のババリア地方の言葉である高地ドイツ語と北方の低地ドイツ語の分離派生をもたらすことになった。この変化で、北方の人々は以前には t をつけていた所へ s を、p を用いていた所へ f を持ってくるよう

になる。これらの変化は勿論のこと英語へ波及するには遅すぎ、結果として英語の water に対してドイツ語の wasser が、また open に対して offen が対応することになった。このような変化は英語に限ったことではない。たとえば4世紀にラテン語の centum (百) がいろいろに発音されていて、その反映が現代フランス語の cent、発音は“sahnt”、スペイン語の ciento, “thiento”、イタリア語の cento, “chento”として残されている。

それから少し経ってイングランドで、一般的に少し誤解の点もなきしもあらずであるが、大母音変移 (Great Vowel Shift) と称されることが作家チョウサーの時代を挟んで起こる。もちろん、ある日突然に別の発音に変化すると言ったことはあり得ず、数世代を経て徐々に変化が起こると考えるべきである。チョウサーは1400年に亡くなるが、その時点で人々は言葉の最後にくる e を文字通りに発音して読んでいた。しかし、それから100年経つとそれは無音となり、明らかに学者すらもが以前にそれが発音されていたことに気づかない始末だった。結局のところ、歴史的に見ればあっと言わせるような急な変化であっても、その渦中にいる人々にとっては、しばしば特に注目されることもなく進むもののようにだ。

この母音変移は、英語の長いまたは強いと言える母音を変えるものである。例を挙げれば、spotの“o”の音が spat の“a”に置き代わるような変化である。また、law の“aw”音が close の“oh”音に替わる。チョウサーの lyf は“leef”と発音されるが、シェイクスピアでは life となって“lafe”と発音されていたが、結局今の life となった。ただし、すべての母音が影響された訳ではなく、bed の e、hill の短い i の音は今日でも1200年前と同じである。

古英語にはあった発音が無くなったものの代表的なものに χ のサウンドがある。これは声のない摩擦音のようなもので、スコットラ

ンドの loch の ch やドイツ語の ach に見られるものである。この音が消えたことで古英語の bur χ (place) が Edinburgh の burgh に、Gainsborough の borough に、Middlesbrough の brugh に、そして Canterbury の bury に変わっていくことになった。

この変移の前は、house の発音は今でもスコットランドで発音されるように“hoose”であり、mode の発音は“mood”であったし、だから home は gloom と韻が合っていたのであった。さらに、Domesday Book (1086年ノルマン人の英国王 William 一世が作らせた最初のイングランド土地台帳) も同じように発音されていて、しばしば Doomesday とも呼ばれる。ただし、これは現代用語の doom (運命、最後の審判) とは関係がなくて、domestic の domes- のことである。このことは最も顕著に“oo”の音に示されている。チョウサーの時代のロンドンでは、すべての二重の o は現代語の food と韻を踏んでいた。しかし、一端この型が破られてしまうと、あらゆる種類の変形が現れてくる。すなわち、blood, stood, rook などなどである。これらの語の大部分は違った場所からやって来た違った人々が違ったやり方で発音し、次第に現代語の形に収斂していったのである。でも、ある種の言葉は今でも収斂しなくて、roof や poof のように goof と韻を踏む人がいると思えば、他の人は foot に韻を合わせている状態である。同様な漂流が“ove”の音に見られ、それが shove, move, hove におけるこの部分の音の差異に現れている。

5 古い時代の発音とその変化

チョウサーやカクスタン (William Caxton; 1422-1491, 英国人だが、ベルギーのブルーズにいて最初に英語の本を印刷し、その後英国に帰り、印刷術を導入した人) の時代に話されていた言葉を聞いた人が今ここに居るわけがないのに、どうしてこれらのことが

分かるのであろうか。本当のところ、確かなことは分からないのだ。したがって、大抵のことは推定に基づいている。しかし、学者は英語がどのように発音されていたのかを韻律、特に歴史的な詩歌における韻律、手紙やその他の非公式の書類を詳細に検討することで推定することができるのである。この意味で、我々は bad spellers に多くを負っている。17世紀、18世紀、19世紀の手紙における数々の誤記 (misspellings) から当時は boiled が byled と、join が gine と、merchant が marchant と、発音されていたことはかなり確かであると知れるのである。エリザベス女王の誤記から次のことが分かる。すなわち、work は“wark”と、person は“parson”と、heard は“hard”と、defer は“defar”と、少なくとも宮廷では発音されていたことが分かる。同じ時代、短い母音はしばしば相互交換されるのが常であった。そういう訳で、not は nat と書かれ、when は whan となって現れる。同様な変化性は次の語でも見られる; すなわち strap と strop, taffy と toffy, God と gad 等にである。

韻律は多くの情報を与えてくれる。我々はシェイクスピアの作品から knees, grease, grass, そして grace のすべてが大なり小なり韻を踏んでいたし、clean と lane も韻を踏んでいたことを知る。シェイクスピアはまた語呂合わせをやっているのも food と ford および reason と raising との間に似た発音があったことを窺わせる。knight や knave における k はシェイクスピアの時代にはちゃんと発音していたし、sea と see は僅かだが違う発音をしていた。同様のことが peek と peak, seek と speak の間についても言える。これらのすべてが特に興味深いのは、丁度この時期にアメリカが植民地化されて、この時期の英語やその発音を基礎にアメリカ英語が発達していくことになったと言うことである。この理由のため、しばしばシェイクスピ

アは英国英語よりもアメリカ英語に聞こえると言われることがある。

ときどき、発音の変化は微妙で不思議なところがある。たとえば、現在次ぎに述べる語ではアクセントの置く場所はそれが名詞として使われるか動詞としてであるかによる。すなわち、defect, reject, disguise などの語である。シェイクスピアの時代までは、これらすべての語は、二番目の音節にアクセントがあった。それから少しして、例外が lebel, record, outlaw の三語について起こった。名詞として用いられる場合は、アクセントが第一音節に移動したのである。時の経つとともに、この型の語の数は増え、約百年毎に倍増していると言う。つまり、1700年には35、1800年には70、1900年には150 になっていて、object, subject, convict, addict などがこれに加わったのである。それでも、千以上の語がこの400年にわたる傾向に影響されないで残っている。すなわち、disdain, display, mistake, hollow, bother, そして practice などがある。なぜこんな風になるのであろうか。実は誰も答えを知らないのである。

6 導入フランス語の変遷

フランス語起源の英語の変遷を調べていくと、その綴りや発音の変化が英語の歴史を語ってくれることがある。17世紀にフランスから取り入れられた語の殆どは完全に英語化しているが、その後に来た語は通常フランスらしさを保持している。このようにして ch- をもつ古い言葉は change, charge や chimney のように明白な tch 音を発達させたのであるが、新しい言葉は champagne, chevron, chivalry や chaperone のように柔らかい sh 音を保っている。Chef は二度にわたって英語に借用されている。最初は chief (チーフ) として硬い ch 音で、後には chef (シェフ) として軟らかい ch 音である。同じような傾向がやはり -age において見られる。旧い形

のものは十分に英語化されていて idge 音になる、つまり bandage, cabbage, language らがそれであり、新しいものはフランス語の“azh”の匂いのする言葉、badinage, camouflage などである。さらに古い時代に取り入れられた言葉では mutton, button, baron のようにそのアクセントが第一音節に移動する傾向が見られるが、しかし新しいものでは、balloon や cartoon のようにそうではない。フランスに近接し過ぎているとか、またはフランス的なものが嫌いだとかの理由で英国人はフランス語の発音を変える癖がある。たとえば、garage を“garidge”とか、fillet を“fill-ut”と発音するとかである。またもとは後方にあったアクセントを前方に移動することをやってのけるのである。すなわち、cafe, buffet, ballet そして pate らがその例である。

7 綴りと発音

綴りと発音は平行に敷設された別々の軌道上を走っている二つの列車に似ている。ある時は片方が先行し、他方がなかなか追いつかないようなことがある。目を引く例は16世紀と17世紀における動詞 hath の has への変化と、doth の does への変化である。最初のころは語尾に -th をもつ動詞は綴りのように文字通りに発音されていた。しかし、1600年から1650年の間の二世代間に綴りはそのままにして、現在の綴りに相当する発音に変わっていったのである。チャールズ一世を1649年に処刑したことで知られるオリバー クロムウエルは hath や chooseth を目にし、その綴りにも係わらず、“has”や“chooses”と読んでいたのであった。後になって、綴りが音に追いつくと言う次第であった。

しかし、しばしば反対の過程、発音が綴りを追いかけることもあった。Atone (償う) は最初“at one”と発音されていたし、atonement は“at one-ment”であった。今日、

多くの人々は often の t を発音し、それはそこに t が有るからだと言っている。しかし、彼らは softn, fasten, または hasten になるとそう発音しようとはしないのである。英語を話す大部分の人は、waistcoat (チョッキのこと) が正しいと言うか、歴史的な発音では“wess-kit”であり、victuals (食べ物; ヴィツルズ) が“vittles”、forehead が“forrid”、そして comptroller が“controller”であることを知って驚くであろう。これらのすべてから、綴りの支配は抗しがたいものと思われる。

これらの綴りが発音を変える例というのは、最近の現象と言えるかもしれない。アメリカ革命の頃、husband は“husban”、soldier は“sojur”、pavement は“payment”と発音されていた。19世紀になるまで、zebra は“zebber”、chemist は“kimmist”そして Negro はその綴りにもかかわらず“negger”（これが侮蔑的な nigger の元になった）と発音されていた。さらに19世紀になるまで swore は sword の場合と同じように w を無音のものとして発音されていたのである。

これらのことは、この話の始めの方で述べた発音は時間の経過とともに不明瞭にぼやけてくる (slurr) と言うこととまっこうから反対するようになるかもしれない。不明瞭になるとは言ってもいつも例外はある。忘れてもらっては困るのだが、言語というものは、科学 (scienc) というよりも流行 (fashion) であり、慣習の問題であって、綴りと発音は女性のスカート丈のように時とともに変化するものなのである。

8 英語の綴り

先にも述べたように、英語の発音で使われている音は40から50くらいである。これを表現するには200通りの記述の綴りの型がある。たとえば、sh の音は14通りの綴りがある、すなわち shoe, sugar, passion, ambitious, ocean, champagne, その他となる。オーの音

は 1 ダースもあって、go, beau, stow, sew, doe, though, escargot, その他に見られる。エイの音についても 1 ダースの音があり、hey, stay, make, maid, freight その他に見ることができる。英単語の綴りは複雑であるので、英語学の権威者すらも間違いをやらかすことになる。たとえば、Webster's New World Dictionary の第二版の最初の印刷で、millenniumをその語の定義を論じる場所で milleniumと誤記していた。また、American Heritage Dictionary の初版では vichyssoise (冷製じゃがいも入りクリームスープ) を vichysoisse と誤記していた。このような例は英語の権威者の著作物においても多く見られるのである。

ところで、次に示す単語のどれが誤記されているのだろうか?

supercede, conceed, procede, idiosyncracy, concensus, accomodate, impressario

rhythym, ophthalmologist, diptheria, anomaly, afficianado, caesarian, grafitti,

実はすべてが間違っている。つまり、ここで言いたいのは、正しく記述するには腹立たしいほどに難しいのが英語なのである。

英語の正しい書きかた、すなわち正書法はそんなに悪くはないと言う人もいる。シメオン ポッターは英語の記述法は、欠点を補って余りある三つの利点を持っているとした。たとえば、子音は、けっこう規則的な発音を有していること、他の言語に見られて複雑にしている字の上や下に付ける読分け記号 (diacritical mark; ウムラウト、シディラ、サーカムフレックス等) が無いこと、他の言語から借りてきた言葉については発音は変えても綴りは元のままを保っているのもその国の人が見ればすぐに分かること等を挙げている。しかし、はいそうですかとすんなり認め

るわけにはいかない。ポッターは、明らか次のような事例を無視している。すなわち、*bloc, race, church*における *c*, *house, houses, mission* における *s*, *think, tinker, mention* における *t*, *host, hour, thread, cough* における *h*, *garage, gauge* における *g* のそれぞれの場合の発音は規則的とは言えない。The English Languageの著者デイヴィッド クリスタルは英語には高々 400の不規則な綴りがあるのみだと言ひ、84%の綴りは一般的なパターンになっている(例、*purse/nurse/curse, patch/catch/latch*)とした。そして3%のみが本当に予測できない綴りを持つと言っている。

3%の語のみが正書法からみてやっかいものであるとは言え、それは想像もつかないひどい例を含んでいる。その代表格が *colonel* である。これは明らかに *r* を含んでいないのだが *kernel* とおなじ発音なのだ。または、*ache, bury, pretty* を見てみよう。発音はエイク、ベリー、プリティで、綴りに注意を払ったとは思えない。また、*four* と *forty* を見てみよう。前者は *u* を含んでいるが、後者にはない。事実、*four, fourteen, twenty-four* までは *u* を含んで綴られているのに *forty* になると突然 *u* が消えてしまう。何故か。

勿論のことなんでも理由はある。ときには、単に不注意から変な綴りが定着してしまったものもある。例えば、*abdomen* は *e* が有るが、*abdominal* にはない。*hearken* (古、雅、聴く)には *e* があるが *hark* (古、傾聴する)には *e* がない。多分、*colonel* の場合はこの気まぐれの典型であろう。この言葉は古いフランス語の *coronelle* に由来する。フランス人はこの言葉をイタリア語の *colonello* から採った。これが16世紀半ばに英語に入ってきたときには *r* を入れていた。それが次第にイタリアの綴りになり、発音のみが残った。約一世紀の間、両方の綴りが用いられ、結局、フランス風の発音とイタリア流の書き方が残っ

たという訳である。

四十を表す *forty* に *u* が無いのにはもう少し変な背景がある。例のチョウサーは、*u* を入れて綴っていたし、事実、17世紀の終わり頃まで殆どの人はそうしていたのである。その後の半世紀の間に *u* が消えていってしまったのである。

通常、英語は論理的に考えてもおかしい程に古い綴りを保っていかうとしている。たとえば、*ache*をとってみよう。シェイクスピアの時代までこれは名詞の場合には *aitch* と発音され、動詞の場合は *ake* と発音されたが、綴り自身もその場合には *ake* と書かれた。このような“ch”音と“k”音の交替というのは一時期、かなり一般的であった、と言うわけで、*speach/speak, stench/stink, stitch/stick* 等の対の存在が理解できる。但し、*ache* の場合は、理由は不明だが動詞の発音を採り、名詞の綴りを残したことになる。

13世紀期に修道僧 *Orm*が英語のより論理的な綴り法と発声法を作ろうと呼びかけたのであったが、無視されてしまった。しかし、彼の提案書には、他のいかなる文書よりも当時の発音についての情報が含まれていて、学者の研究に役立っている。印刷術の出現までの数世紀の間、名前にしる単語にしる綴りは千差万別であった。たとえば、*where* は *wher, whair, wheare, were, whear* などと記録されているのである。人々は彼らの名前についてはもっとのびやかであった。シェイクスピアの名前については80以上の綴りを見いだすことができる。たとえば、*Shagspeare, Shakspere*, など、ひどいものでは、*Shakestaffe* もある。*Shakespeare* 自身も彼のものと判明している六つの署名も二つとして同じものではなく、一つの書類に異なった二つの書きかたをしているものもある。

9 印刷と綴りの固定化

1400年以前の手紙や写本については、その

綴りからそれがブリテン島のどの辺りで書かれたものであるかが判定可能であった。しかし、1500年頃までにこのことが不可能になってしまった。すべてを変えてしまったのは、印刷機械の発明であった。このことは、英語の綴りの均一化に必要だった手段を提供することになったと同時に、当惑させられるような矛盾の多い綴りを今後も受け継いでいくことを保証したのである。

この活版印刷機はヨハネス グーテンベルグが発明したことになっている。実のところ、是はグーテンベルグに彼が受けるにふさわしい以上の名声を与えることになる。本当は活版印刷の方法がオランダ人のローレンス ヤンスーン コスターによって発明されたと信ずるに足る理由がある。あるときドイツのマンハイムへコスターの見習工の一人が活版一式を持って逃げてきた。彼はここに住むグーテンベルグと親しくなった。確かに、人生の最初の40年間を目だたない石工や鏡磨きとして過ごしてきたグーテンベルグが一夜にして、木で出来た活版とワイン絞機を使って世界を変える発明をするなどというのは信じ難い話である。はっきり言えることは、印刷術が驚くべき速さで伝播していったということである。グーテンベルグの最初の聖書が出版されたのは1455年で、それから1500年にいたる間にヨーロッパで35,000以上の本が出版された。グーテンベルグはこれによって殆ど何らの利益も受けなかった。彼は借金を払うために印刷機を売り払い、1468年窮乏のうちに亡くなった。これらの出来事をベルギー北部で注意深く見ていた一人の英国人がいた。

彼の名はウィリアム カクスタン、第5章の始めで少し説明した人、ベルギーの西南に位置するヨーロッパ屈指の商業都市ブルーズ (英 Bruges, フレミッシュ Brugge) で手広く商売を営む富裕で博学の人であった。15世紀の終わり頃、ドイツにおける印刷業の発展に魅せられ、また金儲けの機会があると見て彼

はブルーズに出版会社を設立した。1475年、彼は“Recuyell of the Historyes of Troy”を出版する。だから、少々皮肉めくが最古の英語の出版物は英国でなくフランダースで印刷されたのであった。

イングランドに帰るとカクスタンは、ロンドンのウェストミンスター大修道院の境内に事業所を設立し、歴史、哲学、チョウサーの本等、あらゆる種類の図書を奔流のように出版しはじめ、さらに金持ちになった。これを見た他の人々は、印刷所設立を競った。

1640年までにブリテン島で20,000もの、単なる本ではなくてこの数の表題の本が手に入るようになった。印刷が増えるにつれ、急に語の綴りの標準化の動きが強くなってきた。地域的な語彙の差はある程度の間は続き、そして相当部分は現在も残ってはいるものの、ロンドン綴りが定着しはじめた。現在でもヨークシャー人やスコットランド人が読む段になるとロンドン英語を用いるように、16世紀に首都の英語が全ての印刷物に支配的となった。カクスタン自身も認めているように、ロンドン子が東南に隣接するケント州へ卵を買いにいったとしても意思が通じないのであったが、傾向としては1650年頃には標準化らしきものが現れはじめた。

英語という言語が定期的にどの言語体系にも起こりえる大きな発音変化を経験しているときに、綴りの固定化ということが始まったのである。不運なことであった。結果として、英語の綴りの大部分は400年前に住んでいた人々の発音を忠実に反映したものとなっている。チョウサーの時代、knee や know の k は多かれ少なかれまだ発音されていた。例をあげると、Knight は“kuh-nee-guh-tuh”とどの字も読まれていたのだった。次のような場合、すなわち gnaw, gnat の g, folk, would, alms の l 等の g も l もすべて発音されていた。もしカクスタンがもう少し時代を下がってから仕事をしていれば、aisle, bread,

eight, enough と言った非論理的な綴りは残らなかったであろう。

17世紀になって、英国人たちが古典語への関心を高めた時期に、ある善意に満ちたお節介屋さんがいろんな言葉をラテン語に適合させようとしたのであった。このようにして、以前は *dett* や *doute* と書いていたものを、*debt* や *doubt* であるよう *b* を挿入したのである。元のラテン語では *debitum* と *dubitare* であるのに敬意を表したものである。同様にして、*receipt* の *p*, *island* の *s*, *scissors* の *c*, *anchor* の *h* が入れられたのである。

Tight と *delight* は語源的な理由が見つからないが *night* 及び *right* に調子が合う。*Rime* は *rhyme* になった。ある場合には、これらの綴りの変更がその語の発音までも変えてしまうことがある。すなわち、*describe* (又は *descryve*) が *describe* に、*perfet* (*parfet*) が *perfect*, に、*verdit* が *verdict* に、*aventure* が *adventure* になったが、始めのうちにはこれらの挿入された字は *debt* の *b* と同じく無音であった。しかし、結局のところ発音されるようになってしまった。

ここで一言申し上げる。日本語でも地名などを表すのに適当な漢字を充てて使っている中に、いつの間にかその漢字の普及している読みが優勢になってしまうことがある。

私の個人的な経験で恐縮だが例を挙げる。少年時代を過ごしたのは古い時代から人が住んでいた大阪府の中河内と呼ばれる所であった。農村地帯で「たこち」や「かんめ」と呼ばれる土地があったがそれぞれ「竹淵」や「亀井」という漢字を当てていた。約60年前にはこれらの漢字を人々は正しく、たこち、かんめ、と発音していたが現在では多くの人々が、たけふち、かめい、と発音している。工業化が進み他の地方から流入した人々が多く住むようになったのが原因である。

10 綴り合理化運動

英語における語の綴りの不規則性に業を煮やした有名人は多い。アメリカではベンジャミン フランクリン、マーク トウエン、ノーア ウェブター等が初期にいた。英国ではダーウィン、テニスン、アーサー コナンドイル等がいる。石油で産を成した慈善家のアンドリュー カーネギーは、1906年に25万ドルの資金を *Simplified Spelling Board* を結成するのに拠出したのであった。この委員会は、まず300の普通に二通りの書きかたがされている語 --*ax* と *axe*, *judgement* と *judgment* など -- を取り上げ、簡単なほうに軍配を挙げた。その後、*National Education Association* のような影響力のある団体の支持を取り付けて、今ではアメリカ綴りとなっている *catalog*, *demagog*, *program* などが推奨された。当時の大統領セオドア ルーズベルトはこれに感心し、政府の刊行物に採用する命令を出したのだった。それからが問題だった。委員会はこの成功に意を強くし、もっと野心的な単純化をめざした。それは、*tuf*, *def*, *trouble* (*troubel*), *yu* (*you*), *filosofy* 等を含む数ダースの語についてであった。しかし、これには大きな抵抗の壁が立ちだかった。そして、間もなく起こった第1次世界大戦の勃発とカーネギーの死がこの運動の静かな消滅をもたらすのであった。

語の綴りの改革の呼びかけの前には手の付けられない厄介な問題が横たわっている。一つは、旧い綴りが確立していて、*bread*, *thought*, *once* などがその発音と綴りの間に関係がないことに我々は普段気づかないことである。したがって、英語の綴りを単純化し規則性を持たせる試みは常に *hav a sumwut stranj and uneskapubly arbitrary luk about them, ov cors they kawz most reederz to stummbly*. (この文章は原文のまま)。他の理由として、例えば *eight* は七の次の数を表すには変な綴りかも知れないが、こ

れは eat の過去ではないことを区別するのに役立っている。もしどうしても単一の綴りに固執するのであれば、fissure は fisher に、sew と sow は so となってしまう。また、次に示す発音の等しい語 ; seas/seize, flees/fleas, aloud/allowed, chance/ chants, air/heir, whether/wether 等はどう区別するのかが問題となろう。

ここでも、日本人として申したいことがある。同じ音が、別の綴りに対応して困ると言うのなら日本語を見てくださいよと言いたくなる。ワープロでは平仮名で音を入力し、変換キーで欲しい文字を呼び出すのは我々が日常的に行っていることである。同じ音の漢字が如何に多く存在するかを否応でも認識させられる。そして印刷物のなかに変換ミスをししばしば目にするのである。昔は、印刷物に誤字が見つかる、誤植だと言ったものである。つまり活版印刷では、印刷工が活字を拾って植えていったのでこう呼んだのである。活字を用いない印刷が普及すると、誤植という言葉は消滅の運命にある。

11 おわりに

金属のアルミを英国では Alminium、アメリカでは Aluminum と綴り、当然のことながら発音も異なる。また、「そう思います」をアメリカでは I guess so ということが多い。昔、英国のマンチェスターの酒場で私がこの言い

方をしたら、店の人に日本人なら I think so と言ってくださいよと言われたことがある。

前章で述べた綴りの合理化の努力もアメリカ内でのこととして実施され、その綴りが英国と異なる例が出てきた。そうでなくても、発音では英国とアメリカでは大きく違ってきている。すなわち、大部分のアメリカ人は metal を medal、handbag を hambag、frontal を frunnal、totally を tolly、foreign を forn、そして我々に馴染みの nuclear を cl 間に母音が無いにもかかわらず nookular (ニューキュラー) と発音する。最近この例をブッシュ大統領が北朝鮮の核開発に言及するときの演説でしばしば耳にする。

これらの綴りが、世界の方々に喋られている各種の英語の発音に対応し許容していることが重要である。もし発音に忠実な綴りをとるなら、girl は殆どのアメリカで gurl (ただしニューヨークでは goil) と書くべきだし、ロンドンとシドニーでは gel, アイルランドでは gull, 南アフリカでは gill, スコットランドでは gairull と書くことになるのだ。

なんとも、英語の発音は難しいものである。我々日本人が間違うのも無理はない。

原典 ; Bill Bryson, "Mother Tongue" The English Language, 1990, Penguin Books